



萬成 博教授

萬成 博教授記念号によせて

社会学部長 遠藤 惣一

萬成博先生は、本年3月で定年前ではありますが、新設の吉備国際大学の社会学部長として着任されるため退職されることになりました。

萬成先生は1947年九州大学法文学部（社会学専攻）をご卒業後、同大学院に進まれ、さらに1951年から米国ワシントン大学大学院に入学され、1953年からは米国チャプマンおよびジョージ・ペーパーダイン大学、ミシガン大学大学院で英語研究および社会学の勉学に努められました。1955年4月に帰国と同時に関西学院大学文学部の嘱託講師を勤められ、同年11月同学部専任講師、1960年助教授に昇進されましたが、1960年に社会学部の新設にともなって同学部の助教授、1965年には教授になりました。1968年社会学研究科修士課程指導教授、1973年博士課程指導教授になりました。その間1967年に関西学院大学より文学博士の学位を授与されました。

萬成先生は1972年から4年間2期にわたって社会学部長を務められました。また大学紛争中は全共闘相手の武勇伝は今も語り草となっており、「軍手の萬成」の勇名を轟かされました。しかし紛争後の平常時の学内活動としては学校法人関西学院評議員および理事、情報処理研究センター長を歴任されました。学外活動では日本社会学会理事、組織学会理事、経済社会学会理事、日本労務学会理事として広く学会活動を続けられています。

萬成先生の研究領域は産業社会学であります。先生の研究は産業社会学の発展に対応した研究視野の拡大と研究ポイントの移行を伴った充実の歴史でもあります。すなわち、終戦後アメリカ社会学の旗手として華々しく登場した産業社会学の焦点が人間関係アプローチに特色づけられていた時期に、先生は早くも学会のそうした新しい動向を把握して、「監督者と人間関係」（1958年）において実証研究を手懸けられました。産業社会学がその関心を組織の末端の職場集団の人間関係から組織の構造と機能の研究へと広げていった1950年後半から60年代に、萬成先生も経営組織の社会学的研究に本格的に取り組まれました。その系列の先生の研究は組織論の進展とともにアストン・グループの実証研究やいわゆるコンティンゼンシィ・セオリーに触発されて、いくつかの優れた業績をあげられましたが、特に R. M. マーシュ先生との共同研究は内外で高く評価されています。また同じ時期に先生のもう一つの特筆すべき業績として経営エリートの研究があります。ここでは日本における経営エリートの排出と社会階層の関係を実証的に研究され、多くの論文、

著書を世に問われました。さらにまた日本的経営論が盛んになった頃は、先生独自の議論を展開されましたし、疎外論が問題となったときはその問題に関心を寄せられたり、常に学会の最先端の動向に敏感に対応されておられます。最後にどうしても付け加えなければならないことは、先生のアメリカでの社会学勉強がその後の研究の底辺に一貫して流れる土台となっているということではないかと拝察する次第です。それが先生をして国際比較研究に駆り立てたスターティング・ポイントとなって、日米比較から比較の対象をヨーロッパ、さらに最近では特に中国研究に力を注いでおられます。最終講義のタイトル「中国工場における組織改革について—GZ 重機廠の事例—」はまさに先生の中国研究の取り組みを示すと同時に、今後の先生の研究の出発点となることを示唆しているように思います。このように、萬成先生は産業社会学の領域で幅広い活動を続けてこられました。今年3月に退職されますが、先生のますますのご健勝とご活躍を念願する次第です。